

魔女的文学論



駒尺喜美

魔女的文学論 駒尺喜美

駒尺喜美（こましゃく きみ）

1925年、大阪に生まれる。

法政大学文学部卒業後、現在、法政大学教授。日本近代文学を専攻。

著書に『雑民の魂—五木寛之をどう読むか』（講談社）『芥川龍之介の世界』（法政大学出版会）『魔女の論理』（エポナ出版）『高村光太郎』（講談社）『結婚の向こう側』（主婦と生活社）などがある。

魔女的文学論

Printed in Japan

1982年 7 月 31 日 第 1 版第 1 刷発行

著 者 駒 尺 喜 美
© 1982年

発 行 者 菊 地 喜 三 次

印 刷 所 文 栄 印 刷 株 式 有 限 公 司

製 本 所 東 京 美 術 紙 工

発 行 所 株 式 有 限 公 司 三 一 書 房

東京都千代田区神田駿河台 2 の 9

電 話 03 (291) 3 1 3 1 ~ 5 番

振 替 東 京 9 - 8 4 1 6 0 番

郵便番号 1 0 1

落丁・乱丁本はおとりかえいたします

魔女的文学論・目次

I 魔女が詩を読めば……………7

男と女のいびつな関係 8

支配者としての愛 13

しみついた優越意識 18

男中心の愛のかたち 23

男はいつも与える側 28

許すことの自己欺瞞 33

II 魔女のめがね……………39

魔女が漱石を読めば 40

(1)『行人』にみるへ結婚の本質 40

権威嫌いと平等主義／なぜ『行人』なのか／スピリットをつかめぬ
夫婦の悩み／男の側から男の不幸を見つめる／意識的なへ女らし
い／男・一郎／構成上の注目点／道なき道をさぐる苦闘／結婚制度
の不幸

(2)悪妻にめぐまれた漱石 72

漱石の妻・鏡子の存在／〈悪妻〉の中身を吟味すれば／名作は〈悪妻〉と四つに組んで生まれた

魔女が新人女流作家を読めば 87

もはや〈女流作家〉という語は必要ない／感覚や感性が抜け落ちて……／〈淫ら〉と〈崇高〉に分断されたパターン／〈社会通念〉にからめとられる痛ましさ

魔女がテレビを見れば 101

——「夫婦」をめぐる

ホーム・ドラマは現代版〈説教節〉／分断されている女の世界／夫の人生に従う妻のポジション／子育ては女の〈義務〉／夫の立場は〈殿様〉／奴隷の美德に封じこめる／〈家族〉とは男女分断の根城

Ⅲ 魔女が名作をにらむ

『暗夜行路』にみる^{おとし}貶められた女の性 124

男の子と女の子の持つ経験の違い／女を買うのは惨さを解消するため／優越感で成り立つ男の快感と解放感／従者としての妻／男の暴力は許されている／夫婦の問題をひとりで悟る男の勝手／〈理想〉

の男と結婚した妻の幸福とは

『緋文字』にみる“烙印の女”の愛と不幸 148

裏切られても愛しつづけるヘスター／優者は転んでもタダでは起きない／失うものを持たぬ女は自由になれる／男は社会的欲望を捨てられない／男の栄光と女の恥辱／男支配の“女の愛”／女は結局〈涙と愛〉なのか

Ⅳ 『泥人形』から日本版『人形の家』まで……………169

『人形の家』と『泥人形』 170

男の側から結婚を見れば／男が女に望む自己矛盾／男は結婚で人生のコースを変えない／むくわれぬノラの愛／人形として所有されることによる女の幸福／夫の愛の裏側を知るノラ／自立するノラに夫の妥協は通じない／奴隷の誇りからの解放こそ……

『伸子』にみる結婚 196

女は妻君的適応を要求される／家庭は夫中心の生活形態／結婚生活での百合子の苦闘／結婚の矛盾を階級イデオロギーに解消する

あとがき 212

魔女的文学論

I

魔女が詩を読めば

男と女のいびつな関係

——詩の中の女（その一）

おきく

くろかみながく

やはらかき

をんなごころを

たれかしる

をとこのかたる

ことのほを

まこととおもふ

ことなかれ

をとめごころの

あさくのみ

いひもつたふる

をかしさや

みだれてながき

髻の毛を

黄楊の小櫛に

かきあげよ

をんなごころは

いやさらに

ふかきなさけの

こもるかな

小春はこひに

ちをながし

梅川こひの

ために死ぬ

ああ月^{つき}ぐさの

きえぬべき

こひもするとは

たがことば

こひて死なむと

よみいでし

あつきなさけは

誰^たがうたぞ

みちのためには

ちをながし

くには死ぬる

をとこあり

治兵衛はいづれ

恋^{こひ}か名^なか

忠兵衛も名の

ために果^はつ

ああむかしより

こひ死にし

をとこのありと

しるや君

お七はこひの

ために焼け

高尾はこひの

ために果^はつ

かなしからずや

清姫は

蛇^{へび}となれるも

こひゆゑに

やさしからずや

佐容姫は

石となれるも

こひゆゑに

をとこのこひの

たはぶれは

たびにすてゆく

なさけのみ

こひするなかれ

をとめごよ

かなしむなかれ

わがともよ

こひするときと

かなしみと

いづれかながき

いづれかみじかき

(若菜集・島崎藤村)

明治三〇年、島崎藤村二五歳の時、最初の詩集『若菜集』を世に問うた。そこに収められた恋愛詩は、若者の心を強くとりえたに違いない。当時の道徳習慣からいえば〈恋愛〉は日陰者であったのだから、それを正面から謳いあげただけでも一つの衝撃であったであろう。

「おきく」は、『若菜集』の巻頭を飾る、「六人の処女」と題された連作の一つである。

「おえふ」「おきぬ」「おさよ」「おくめ」「おつた」「おきく」というこの一連の恋愛詩を読んで、わたしが一番不思議に思ったのは、何故、藤村は男の気持を歌わずして、女の気持を歌ったのかという事であった。「おきく」のみわずかに違うが、他は殆ど女になりかわって歌っているのである。これは現在の流行歌に至るまでそうだが、恋心を歌うとき、作者は男でも女心を歌う事が多い。藤村はおそらく無意識でそうしたのでろうが、恋愛を人生の真正面から取り上げながら、しかしやはり、それに真正面から取り組むのは、男ではなく女であるとの意識が無意識のうちに働いたのだと思う。

藤村は自己の失恋の傷手を、深いモチーフとしていっていたが、それでも恋心を歌うとき、おのずから女として歌い出したというのは、なかなか興味のあることである。そこには恋は女のものであるとの現実が、はっきり刻印されている。「おきく」にはその辺の事情が、期せずして歌われている。男は道のために血を流し、国のために死ぬ。だが恋死する男はいない。男の恋は「たはぶれ」であり「旅にすてゆく情け」でしかあり得ない。そんな男を女は命をかけて愛す。このうす情けの男にあつき思いをかける女心を哀れがって、藤村は「恋するなかれおとめごよ」

といつてはみるが、しかし自分が受ける。とすれば、やはりお七やお夏のような命がけの女の愛を受けたい、そんな身がつてな男心がこの歌にはひそんでるように思われる。

男の人生は国、社会、仲間、仕事、遊び、家、妻、恋と広く開かれている。が女はその男に養われて生きるようにしむけられ、家の中に閉じ込められている。女はするように閉塞的な状況におかれてゐる故に、女の情熱、生命力はたった一人の男に向つてのみ吹き出す。その男と女の関係構造の不当さに、藤村はもちろん気付いてはいない。だが現在でも、このいびつな関係構造の不当さに気付いている人はそう多くはないのではないだろうか。

支配者としての愛

——詩の中の女（その二）

女人に対する言葉

愛してやれ

接吻してやれ

できるだけ大切にしてやれ

掃除を好きになれ

家を美しく清め

うまいものを焚^たぎ

いつも困難に勝ち

心を温かに持ち

又一切を優柔に

極めて極めて女らしく本質的なやう

決しておこらないやう

よき母親になるやう

近所の子供がなづくやう

乞食には少しづつ与へるやう

朝夕の祈りを忘れぬやう

偉い女人にならうとするな

偉くはひとりでなれるのだ

自分でならうとしなくても

世間がさうしてくれるのだ

自分の夫を神のやうに思へよ

自分の夫の知識を食べるやう

夫の本は時時に読め

机をきよめ

火鉢に火をおこし

鉄瓶には湯氣を立たし

茶と茶器とたばこを供へるやう